

# 理念経営と『グローバル企業』をめざして 時代の変化に対応したものだけが生き残れる！

株式会社カワキタ 代表取締役 河北 一郎 氏

(中河内ブロック／東大阪第三支部)



(株)カワキタは、昭和21年に河北さんの祖父が創業。セルロイド～プラスチックの金型製作、射出成型、現在はファブレスメーカーとして、キャラクターグッズ、タレントグッズ、子ども向け文房具などの可愛い“夢”のある商品を作っています。40歳で3代目社長に就任し、今年53歳となった河北一郎さんに、第二創業としての取り組みと話を語ってもらいました。

## 継がないと決めていた(株)カワキタの社長に

子どものころはよく工場に遊びに来ていたものの、大学時代には「親父の会社を継がない」と決めていたと話す河北さん。大学を卒業し、やりたいことを見つけにアメリカへ渡り、その後、オーストラリアで旅行の仕事を始めます。日本に帰る気はなかったものの、中小企業大学校で経営の勉強をする機会が与えられ、22名の後継者仲間と出会います。ここで初めて父親の仕事に向き合い、子どものころに可愛がってくれた社員さんが今も頑張っている姿を見て、カワキタを継ぐことを決心したそうです。

## 新しいことにチャレンジ

キャラクター雑貨などのOEM100%の会社でしたが、お客様の方針転換によって、1億円の売上がゼロになったことがありました。お客様にすべての決定権があるOEMの怖さを痛感し、自社ブランドに力を入れ始めます。その後さまざまな挑戦を続け、最近ダッコーリーノというカバンが抱っこひもに変身する唯一無二の商品が生まれたりもしています。今年8月、このコロナ禍に東京営業所を開設するなど、さらなる挑戦を続けています。

## 海外とのかかわり

カワキタは、1984年に自社工場の金型・成型部門を廃止し、ファブレスメーカーとして製造をしています。その拠点として台湾、韓国、中国の企業との取引を行っています。河北さんは学生時代から、海外に興味があり、バックパッカーもやっていたそうですが、中国にはあまりいい印象を持っていませんでした。個人旅行でも中国へは行ったことがなかったのですが、仕事で中国へ行った時、驚きを覚えました。「今日の中国の発展は目覚ましい。もっと、早くから中国を見ておけばよかった」と思ったそうです。「まだ訪中団へは参加したことはないのですが、次回はきっと参加したい」と話していました。

## コロナ禍の中でチャンスを見いだす

コロナ禍になり、時差出勤、テレワーク、自転車通勤…。会社として、何が正解かわからないまま、何をすればいいのか…という状況の中「大したことはないと思っていた新型コロナウイルスの影響がひどくなってきて、会社の雰囲気ガシガシしている」と河北さんは感じていたそうです。しかし、一方で「今はこのコロナのおかげで、変化せざるをえない環境になっています。改革や変化がしやすくなっていると思うのです。ダーウィンの進化論でもいわれるように『時代の変化に対応したものだけが生き残れる』と思いますので、今はこれからもどんどん変化して時代に適応していこうと考えています」とも話していました。

## 理念経営で、グローバル企業へ

「理念経営を続けており、方針に4年後の目標も明確にしています。事業承継についても書くようにしています。65歳には次の世代に経営を譲り自分は次の人生を送れるようにしたい。ワークライフバランスのひとつとしても、在宅勤務の加速やどんな家庭環境の人でも働きやすい職場を作っていくことで、カワキタで働いてよかったなという人を増やすことが最大の理想です。そして世界的な視野に立ちながら地域のことを考える『グローバル企業』(グローバルとローカルを合わせた造語)をめざして、地域に根づいた活動と社員の幸せ、そして地域の子供たちに夢や希望を知ってもらい、将来の選択肢を広げることができる社会に貢献できればと思っています」と今後の抱負を語られました。

取材・文 日中経済交流研究会 広報委員会

取材協力 東大阪第三支部の皆様